
時間と想像が僕の武器。

シロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時間と想像が僕の武器。

【Nコード】

N1848BA

【作者名】

シロ

【あらすじ】

主人公の『僕』はごくありふれた学生。そんな僕は、ちょっと頭が良いだけしかとりえがなかったが、ある日の夢を境に

キャラに特に強い特徴はありませんが、物語の構成、展開などで面白くしていきたいと思います。

とにかく読んで頂けると幸いです。

！！第二話更新！！

誤字脱字等がありましたら、コメントまで・・・

夢でパニック!? (前書き)

僕「僕の小説を見てくれてありがとう。」

シロ「俺のなんだけど……。」

僕「楽しんでね^^」

シロ「だ・か・らー俺のだって!!!」

夢でパニック！？

僕には望みがあつた。家族がいて、休日になるとみんなで出かけたり・・・そんな当たり前の生活。

僕の昔は、こんなことが欲しかったんじゃない。昔の僕はゲーム機が欲しかったり、おいしいものが食べたかったり、言うならば欲望丸出しの人間だ。

そんな僕があんなシビアなことを言うのにはわけがあつた。

3年前、両親は事故に遭い死んだ。その時9歳の僕には、両親の死が理解できたし、事故の原因の交通事故ということも理解できた。僕のことをみんな大人びてるとか、クールとか、褒め言葉と受け取ればいいのか分からない言葉を何かあると言ってくる。

小学6年生の冬から物語は始まる。

3人の少年が雪原を歩いている。そのうちの一人が僕だ。周りの人は、ありふれた幼馴染だ。

「今年の冬は寒いな〜」

「でも、何で寒いのかな？冬だけ・・・??」

「冬は四季の一つ。一般的には、一年中で最も寒い期間を指すが、二十四節気や旧暦のように・・・」

「分かったよ、分かった。お前の博識はウチの学校の生徒なら誰でも知ってるよ、」

「そうですね、もうやめてください。」

人を騒音を出す奴みたいに言うな・・・

「じゃあ、やめとくが・・・」

「それにしても寒いな〜」

学校への道のりが遠く思えた。着いたところには、体が震えていた。みんなも同じ状態なのか、暖房器具に集まり体を温めていたり、持参したカイロ等を使い暖まっている。

僕たちが来た時は遅刻ギリギリだったようだ。1分ぐらいすると、先生が来た。

暖房器具で暖まっていた生徒は、自分の席へ座り授業の準備を始める。

「今日は2月19日です。なので、もうすぐみんなは卒業です。中学生への準備を今から徐々に始めて行きましょう。」

先生の心境を考えた。辛いだろっとな、表情なんかに出さなくても、

「……なあ、昼休み何して遊ぶ。」

それなのにコイツは、

先生の話も終わり、僕は授業の準備をすることにした。

その間中、休み時間の予定を立てている幼馴染の黒羽快斗くろはね かいと。

「僕に聞くななんて、間違いだよ。他に聞いたら、」

「またまた〜ホントは遊びたいくせに、」

確かに適度な運動は大切で、たまにはコイツに付き合って遊ぶけど、それは……そう、健康のためだから……うん。

「お前はツンデレだから、しょうがないけど……」

ツンデレ、、意味は知っているが……使った人はコイツが初めてだ。

「僕は、ツンデレじゃない!!」

「おゝ熱い。ムキになるなよ。」

落ち着け。取り乱すな、あんな奴の言葉に……

「と・に・か・く、昼休みはグラウンドに集合。」

グラウンド……何の遊びをやるつもりだ。雪が積もったグラウンドなんかで……。雪合戦とかだろっ、妥当に。
「ヒマがあったら行くよ。」

僕にとって授業はヒマでしかない。すでに知っている知識を先生が説明するだけ、そんな時間は考え耽^{ふけ}ったり、絵を描いたりしている。
休み時間になると、しょうがなくグラウンドに向かうことにした。

グラウンドに着いた時、驚きを隠せなかった。

「さっ、サッカーやろっぜ!!」

「は!?!」

サッカーって雪がこんなに積もってるのに、

「バカだろ、お前。」

「そりゃ、お前から比べればバカだろ、学力診断テスト3位のお前から見たら……」

「そういうことじゃない!!こんな雪が降り積もったグラウンドで

サッカーなんて！！！！ドリブルすらできないだろ、」

「できるよ、俺のやってるサッカーゲームでは、できたし、」

「ゲームだろ、実際にできるわけないだろ。」

「ゲームはな〜実際に体験したことを参考に作ってるんだぞ。」

「何ゲームについて語ってるんだ！！！！」

二人での会話に疲れてきたところでみんなが来た。

「何するんだ〜グラウンドで、」

みんながどんな反応を示すかこれからの反応が楽しみだ。

期待に満ちた僕の想像を覆し、くっがえ

「おもしろそうじゃん！？さっそく始めようぜ！！！」

みんなバカだ。

予想通り、試合はグチャグチャ。歩くのがやっとで試合は引き分けでPK戦をやって終わった。

放課後になり、帰ろうとしていると、呼び止められた。

「待ってください。いっしょに帰りましょうよ〜〜〜」

「いいよ、別に。」

これが俺のもう一人の幼馴染の千藤司。せんとうつかさ

二人についての説明は長くなるので止めておく。

二人で他愛もない話をしてるといつの間にか家に着いていた。

「じゃーな、」

「また明日。」

家には、誰もいない。おばあちゃんは買い物で、おじいちゃんは、暮でも打ってるかな??

一人でいることには慣れたが、それでもいまだにひどい喪失感を覚える。

俺はいつの間にか眠っていた。

「……………ここは、ゆめか？」

『M我y……ゼr……キアツツ』 ノイズ交じりの声を俺は聞き取れなかった。

それが段々聞こえるようになり、何を言っているのか分かった。

『我が名は、時と創造の神……ゼルキア。』

俺の夢にしては、SFチックだな。

『お前に力を貸す。お前には、それについて理解できる知識もあるだろうから大丈夫だろう。』

何のことが理解できない。

『そして、いつか何のためにこの力があるか、考えてみる、』
『どういうこと……』と

突然、視界がクリアになり夢から覚めた。

「今のは……」

夢か？ゲームでもするか、眠気覚ましに……

ゲームを起動させると、バッテリーがなくなっていた。

充電器を取るのも面倒で、俺は『バッテリーが回復すればいいのに、』
『と思った。』

すると、バッテリーはいつの間にか回復している。

「どういうこと!？」

今度は、『ペンがここにあれば、』と思っただけで、地面にはポールペンが転がっていた。

「スゴイ……でも、こんなスゴイ力には、やっぱりデメリットが……」

体に異常はない。とりあえず大丈夫か。

疑問は尽きない。でも、今はそれは置いておき、あの夢について考える。

あしがきらいと
荒垣来人十二歳、スゴイ能力手に入れちゃった。

夢でパニック!? (後書き)

僕「読んでくれたんだね、ありがとう。」

シロ「ありがとうございますm) . . . (」m」

僕「もっと喜びなよ、読んでもらえたんだよ。何そのやる気のない顔」

シロ「お前がさっき!!!」

僕「はいっ、今回は幼馴染を紹介します。」

黒「黒羽快斗です。」

千「千藤司です。よろしくお願いします。」

僕「二人とも得意なこととかないの?」

黒「お前、性格変わってるよ。いいか、そんなこと . . . 俺は、サッカーが得意かな。」

僕「サッカーねえ、冬に外ではもうサッカーやらないよ、。」

黒「わ、わかったよ、。」

千「次は、僕ですね。僕は 読書ですかね。」

僕「んーやっぱり読書か 地味。」

僕以外全員「お前が言うな!!!」

僕「とにかく、最後に

(全員) 読んでくれてありがとうございましたー

落ち着き、考える僕。(前書き)

シロ「今日は、来々・・・『僕』がいないので思いつきり話せます。えーと主人公の来々くんは、基本的に名前や名前で呼びません。話的には、名前で言った方が分かりやすいのですが・・・作者の事情です。」

僕「僕の紹介してるんだ〜　そういう設定言わないでよ・ね!!　!!!」

- - -
- - -
- - -
- - -

シロ「来々による妨害があり、また今度設定を色々話したいと思いません。」

落ち着き、考える僕。

どうする???

この能力。^{チカラ}何のデメリツトもなく、こんなスゴイことができるなんて・・・

能力について、発見したことは・・・

1：頭で考えたことが実現する。（僕の想像がうまくできないと出てこない、）

2：時間を操ることができる。（能力持続時間30分）

この二つだ。発見できたのも、偶然だった。最初のはさっき、次のは考えてたときに『もつと考える時間があったらな〜』と考えていたら自然とできたから発見できた。

能力は他にもあるかもしれないが、こういう危険な能力はなるべく使わない方がいいだろう。

理由は簡単。こんなスゴイ能力を持っている人間を見つけたら普通、忌み嫌う。人間は自分とは違う、優れていたりするとそんな感情を抱く。他にも研究、実験で僕が利用されたり、狙われたりするかもしれないからだ。公にこのことは、出さない方がいいだろう。

・・・でも、使いたい。

これがあれば、色んな事が出来る。何一つ不自由のない生活を送れたり、何か、何でもいいが世界大会や名誉ある賞なんかを受賞できたりもする。

でも、そんなことをすれば きっと

考えたら行動に移していた。

頭でソレを思い浮かべていた。

そしてそれは叶った。

そこに広がるのは静かなりピングではなく、暖かい団欒を繰り広げる家族だった。

そこにいないはずの人たちがウチの家の机で食事をしながら、何かを話している。

「と、とうさん

かあさん

」

そして、そこには僕もいた。小さい頃の僕が、

近づこうとすると、そのありえない光景が消えた。

僕は何度もその光景を見た。

まるで『マツチ売りの少女』だな と、涙を浮かべつつ僕は笑った。祖父たちが帰ってくるまで…… ずっと。

落ち着き、考える僕。(後書き)

シロ「何かどんどん悲しい展開になってくるな〜シリアスっぽい
し・・・」

僕「お前の表現力が足りないからと構成がしつかり練りこまれてな
いから、こうなるんだよ〜」

シロ「うっ 痛いところを突くな、、、、、とにかく読んでくれてあ
りがとございます。

実行に移してみる！！（前書き）

シロ「前回は短すぎたので、今回はちょっと長く書きたいと思います。（それでも少ないんですが・・・）」

僕「なら、もっと頑張れば。」

シロ「お願いします。毒舌やめてください、」

僕「毒舌じゃない、愛の鞭だ。お前を鍛えるためだ。」

シロ「ああ、もういいので、ホント・・・。」

実行に移してみる！！

マッチ売りのまねごとを繰り返して、ふと考えたことがあった。

『家族を取り戻すことはできないだろうか？』……で
も、これはやってはいけないことだ。その行為が『今』を変えるかもしれない。頭のどこかにしまおうとしても、しようとしても……
・「この気持ちだけは……変えられないよな、」そう、
変えられない。僕は、家族とのあの温かな空間を取り戻したい。
たとえ、何が犠牲になろうとも。

想像で家族を作るとも考えた。だがそれでは、僕が見た家族の表面的な部分しか想像できないと思いやめた。僕は本物の家族。あの父さんと母さんに会いたいんだ。表と裏。裏がどんな姿であろうと、僕はどっちもそろった両親にもう一度

そして、今から実行しようとしているのが時間を操る方法だ。あの交通事故がなければ死ぬことはなかった。つまり3年前に戻って、何らかの方法で両親をあの事故現場に行かせなければいいんだ。それはいたって簡単。

すぐに荷物をまとめると僕は、『時間や3年前のこの場所へ』と念じた。

すると、周りの空気が逆行した。去年買ったゲーム機が消えて、昨年買ったジグソーパズル（未完成）が消えた。その他にもさまざまな物が俺の部屋から消えた。

時計を見ると時間が逆に刻まれていく。大丈夫。ちゃんと成功している。不安になった、自分自身を落ち着かせて待った。あの日を、

ふと、空気が変わっていた。周りを見渡すと逆光の現象が止まっていた。

ホツと肩をおろしたのもつかの間に、

「君、誰？」

ここは僕の部屋だから、当然今話しかけている男の子は僕だ。急な展開にも驚かず質問できるところは、さすが僕だ。

「まさか、泥棒？」

確かに突然そこに何者か、正体のわからない人がいたら誰だってそう思う。

「泥棒じゃないよ、ちょっとここでやることであって、お邪魔してるんだ。」

こんなときに、どう対処すればいいのか分からない僕は、訳のわからない発言をした。

それに何かを感じたのか、納得してくれた。

「今日は親が二人で何処か出かけるから、ヒマなんだ。だから、面白そうなことは大歓迎だよ。」

僕はこんなに自分がポジティブだとは思わなかった。

「今、両親は？下で準備。母さんの準備に時間がかかって、出かけるのが遅れてるんだ。」

好都合だ。今のうちに何かしないと・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1848ba/>

時間と想像が僕の武器。

2012年1月6日15時50分発行